ペルシア語訳『法華経』と ハウゼ発の仏教講義・仏教書

Persian Translation of *Mahayana* and Published Works and Lectures on Buddhism in Qom

前 田 君 江^{*}
MAEDA Kimie

パーシャーイー⁽¹⁾ A (eyn). Pāshāyī によるペルシア語訳『法華経：マハーヤーナ（大乘）経典』、および、同著・訳による『法華経研究：（附）「無量義経」訳・法華経用語辞典』が、刊行された。⁽¹⁾ いずれも500頁に及ぶ大著であり、日本国際交流基金の出版翻訳助成を受けたものである。

イスラーム国での仏教経典の翻訳などという奇異に感じられるかもしれないが、東洋の果てで『クルアーン』やら『ハディース』やら神秘主義文献やらが研究され翻訳されている様も、当のムスリム諸氏にとってみれば、十二分に奇怪であるにちがいない。

訳者のパーシャーイー氏は、稀な経歴をもつ人物である。まず、イラン現代詩で唯一「国民的詩人」とも呼べる絶大な人気と影響力を誇った詩人アフマド・シャームルー Aḥmad Shāmlū (1925-2000) の無二の親友で彼の詩の批評家として知られ、シャームルー全作品の著作権と編集権を終身保有する。さらに、文学翻訳に関しては、前述の詩人シャームルーによる名訳として名高い『俳句：はじまりから近代まで』（初版1982/3年）の共訳者・解説者である。加えて、仏教、禅思想、道教、中国・インドの歴史と思想、および、上記シャームルーに関する評論・研究資料集など、20冊あまりの著書と50冊を超える翻訳書を上梓している。個人的な事柄ではあるが、筆者は、上記詩人シャームルーの研究を進めるなかで、シャームルー批評家であるパーシャーイー氏より多大な支援や助言を受けて来た。⁽²⁾ 同時に、同氏の俳句翻訳等への協力を通じ、氏の仏教研究の全貌を知ることになった。⁽³⁾ 本稿では、その一端を記したい。

パーシャーイー氏の著作のうち、イラン国内においてよく知られ、版を重ねているものとして、『仏陀』（初版は1968/9年、2008年には第9刷）、『禅とは何か？』がある。また、とくに、ファルハングスターン（イラン文化アカデミー）刊行の翻訳書として、⁽⁴⁾ 『仏教芸術と建築』、『仏陀の道』、『曼陀羅、理論と実践』などが知られる。

* 東京大学教養学部非常勤講師
Lecturer, College of Arts and Sciences, University of Tokyo

パーシャイー氏は、テヘラン師範大学において東洋哲学を専攻したのち、高校教員を務めていたが、パフラヴィー朝末期に秘密警察 SAVAK によって教職停止処分を受けて以降、執筆活動に専念する。いわゆる在野の仏教・東洋思想研究家であるが、1994-95年には、国際交流基金フェロースhip招聘研究者として、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に在籍したほか、2003年にはゴムの宗教大学 (Dāneshgāh-e Adyān o Mazāheb) (当時「宗教教育研究センター Markaz-e Moṭāle‘āt o Taḥqīqāt-e Adyān o Mazāheb」) の客員講師を務めた。その後も、ほぼ毎年同大学に招かれ、仏教についての講演を行っている。いわゆるハウゼ (houze-ye ‘elmiye=イスラーム神学校、ひいては宗教界全体を指す) で仏教学講義を担当したのは、彼が初めてであった。以下では、I. 上記法華経訳の概要と、II. ハウゼでの仏教講義、および、近年ゴムで出版された仏教書について簡略に紹介したい。

I. (A)『法華経：マハーヤーナ (大乘) 経典』(ペルシア語訳)、(B)『法華経研究：(附)「無量義経」訳・法華経用語辞典』の概要

(A) は、鳩摩羅什 Kumarajīva (訳)『妙法蓮華経』の英訳 Leon Hurvits, *Scripture of The Lotus Blossom of The Fine Dharma (The Lotus Sutra)*, New York: Columbia University Press, 1976 に基づくペルシア語訳で、いわば重々訳である。なお、仏教国日本においても、サンスクリット原典からの『法華経』訳がないわけではないが、1500年近くにわたって親しまれてきたのは、六種ある漢訳のうち、全八巻二十八品から成る鳩摩羅什訳のテキストである (より正確には、鳩摩羅什が率いた、後秦・長安の僧侶や学者ら翻訳者集団による編訳テキストである)。

一方、(B) の第3部では、サンスクリット語原典も踏まえつつ、ペルシア語訳『法華経』の定本としたハーヴィツ訳以外の英訳テキスト6点、ソグド語訳テキスト1点を比較対照している。また、第4部では、人名や専門用語を収めた詳細な用語辞典を付している。同用語辞典、および、(A) の人名・用語索引では、とくに日本を視野に入れた仏教研究の慣例に従い、サンスクリット・英語の専門用語と併せ、中国語・日本語の用語が存在するものはほぼ全て示している。「浄土」に pāk-būm, 「普賢経」や「妙法蓮華経」には、それぞれ, Sūre-ye Arjomand-e ‘Ālam, Sūre-ye Gol-e Nīlūfār-e Darma-ye Shegeft-angīz などの訳語が充てられているのも興味深い。また、「菩薩」などは、サンスクリット語の bodhisattva を起源とする語彙 būdāsaf (アラビア語では būdhāsaf) の語が元来ペルシア語に入っている。アフガニスタンのみならず、インドを通じて、仏教と長い文化的交流があったことを改めて思わせる。

また、(B) の第1部では、1) インド・中国・日本における『法華三部経』⁽⁵⁾の成立・

伝播・変容と、各地域の仏教に与えた影響を概説しているほか、法華経の思想について論じている。くわえて、『法華三部経』の第一部を成す『無量義経』の位置づけを説くとともに、同書第2部では、H. Bunno, W. E. Soothill *et al.* (trans.), *The Threefold Lotus Sutra*, Tokyo/New York: Kosei/Weatherhill, 1975 を介し、同経典全テキストを訳出している。

上記書二冊の装丁もなかなか見事である。(A)は背表紙、タイトル文字がともに薄い爽やかな金色で、表紙と裏表紙には、蓮の花と葉がやはり金色で描かれている。(B)も同じスタイルだが、こちらの方はいずれも、爽やかな銀色である。

なお、日本にも法華経を奉じる有力な宗教法人は数多くあるが、同経典のペルシア語訳に際しての学術的支援、さらに、(A) 所収の資料写真の提供を申し出、全面的に協力したのは、立正佼成会出版部であったという。中東国研究者による日本の宗教研究を取り巻くこのような実情の一端も、我々は知る必要があるだろう。

II. ホウゼ発の仏教講義と仏教書

最初にも述べたように、パーシャーイー氏は、2003年にゴムの現・宗教大学で仏教学の講座を担当した。1年間にわたる週一時限の授業であり、仏教思想とその歴史について概説した。なお、同大学には、「イブラーヒーム宗教」（すなわち、イスラーム、キリスト教、ユダヤ教の一神教を指す）と「非イブラーヒーム宗教」（仏教、ヒンドゥー教、シーク教）の二つのセクションがあり、後者が彼を招聘した。講義内容についての制約もなく、自由な講義が行われるなかで、約15人ほどの神学生が出席したという。

興味深いのは、氏が1年間の講義期間中に、同大学発行の『七天界 *Haft Āsemān*』誌に仏教と神道についての論考4本を発表したのみならず、仏像（*mojassame-ye Būdā*）の写真掲載を許可されたことである。いわゆる「偶像」は、イスラームが最も忌み嫌うもののひとつであるだけに、氏自身も、これには驚きを隠せない様子であった。

さらに、同氏は、同講座終了後も、毎年同大学に招かれ、仏教史などについての講演を継続して行っているほか、同大学の出版局「宗教出版 *Nashr-e Adyān*」から、『見えないまつ毛』、『法華三部経』、『禅における無心』などの研究書・翻訳書の出版を行っている。⁽⁷⁾ここ数年、イランでは、イスラーム宗教書以外のあらゆるジャンルの書籍に対し、新刊・再版を問わず、イスラーム指導省からの許可が下りないとの不満を多く耳にする。パーシャーイー氏も上記書の許可をテヘランで得ることが難しかったため、ゴムへ持ち込んだところ、すぐさま出版と相成ったらしい。ゴムは、イラン・イスラーム体制の牙城のひとつでありながら、イスラーム法解釈などの宗教的見解のみならず、学術出版においても、一定の独立性と自由を享受しているようである。

最後に、上記『法華經三部經』の冒頭に付されたゴムの宗教教育センターによる前書きに触れたい。言うまでもなく、イスラームにおいては、仏教のごとき非・一神教は宗教とはみなし得ず蔑視されている。しかし、同書前書きでは法華經の歴史的重要性に触れ、同經で説かれているのは、「他の大宗教にも見られるように、すべての人間の本性と救済である」と述べ、仏經典が「神より啓示された (vahyānī)」聖典に類するものであるという「補足」を加えている。さらに、仏陀の十号（十の称号）のひとつである「仏世尊」（ペルシア語訳は「世界の誉れ」Sarvar-e Jahān）に言及してルーミーの詩を引用し、預言者ムハンマドの美称 Fakhr-e Jahān「世界の誉れ」を引き合いに出すという配慮も忘れていない。イスラーム国における仏教の扱いの難しさを垣間見るようで興味深い。

注

- (1) *Sūre-ye Nīlūfar: Yek matn-e Budāyī-ye Mahāyāna*, Tehrān: Enteshārāt-e Farāvān, 2008; *Pazhūheshī dar Sūre-ye Nīlūfar: Hamrāh bā Sūre-ye Ma‘ānī-ye Bī-shomār o Farhang-e Sūre-ye Nīlūfar*, Tehrān: Enteshārāt-e Farāvān, 2008.
- (2) ‘A (eyn). Pāshāyī & Kimie Maeda (trans. & commentary), *Lāk-e Pūk-e Zanjare: Hāy kū-ye Zhāponī, az zabān-e Zhāponī*, Tehrān: Enteshārāt-e Yūshij, 2002（邦題『空蟬』；サントリー文化財団2002年度海外出版助成、および、国際交流基金平成13年度出版交流プログラム翻訳助成による）。
- (3) 本稿作成にあたり、不明な点については、パーシャイー氏本人から必要な情報や資料を提供していただいた。この場を借りて、感謝申し上げる。
- (4) パーシャイー氏の仏教研究・翻訳の傾向や問題点については、別稿に譲ることとする。
- (5) 『無量義經』一卷三品を開經とし、『妙法蓮華經』八卷二十八品を根幹部分とし、『仏説観普賢菩薩行法經』（『普賢經』）一卷を結經とする三部をもって『法華三部經』と呼ばれる。
- (6) 「無量義」とは「数限りない意味をもつ教え」の意。
- (7) いずれも Qom: Nashr-e Adyān より刊行。T. D. Suzuki, *Naẓariye-ye bī-deli dar Zen*, trans. by ‘A (eyn). Pāshāyī & Nastaran Pāshāyī, 2004/5; Nikkyo & Nichiko Niwano, *Mozhehā-ye nādīdānī*, ed. & trans. by ‘A (eyn). Pāshāyī, 2010/1; ‘A (eyn). Pāshāyī (ed. & trans.), *Sūre-ye Nīlūfar-e Se Gāne: Matn-e Budāyī-ye Mahāyāna*, 2011（A・B書に所収の「無量義經」, 「妙法蓮華經」に加え, 「仏説観普賢菩薩行法經」の全訳が収められる）。ほか2冊の仏教関連書を同社より刊行予定。